

令和元年6月3日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02599

研究課題名(和文)ディアスポラ・アイデンティティの解体と記憶の抵抗 文学の紐帯機能の綻びと修復

研究課題名(英文) Disruption of Diaspora Identity and Resistance of Memory -Replication and Repair of Literacy Function-

研究代表者

鈴木 道男 (Suzuki, Michio)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：20187769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：メンバーの専門領域であるルーマニアの二つのドイツ系ディアスポラ(ズィーベンビュルゲン及びバナート)、チェコのロマ、旧英領マラヤの華僑とインド系住民のディアスポラ問題という各分野の状況を踏まえ、それぞれのディアスポラ・アイデンティティの解体の危機に際して、文学が果たした抵抗作用を具体的に明らかにした。

これらをもとに、ディアスポラ・アイデンティティの解体の局面における文学による「記憶」の客体化について、ディアスポラ一般の振舞の傾向まで推測することが可能であることを示した。また、グローバル化の中でなぜディアスポラ集団の文学活動が熱を帯びる傾向にあるのかという問題に対する解答の一つを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ディアスポラ集団の概念を最大限拡張しても、その集団の大きな紐帯である文学作品が、集団の解体を防ぐ方向に機能する傾向にあること、また文学自身の風化が新しい文学作品の産出によって食い止められ、新たな意味付けが行われることによって文学の機能が維持されることを示した。あらゆる民族がそのディアスポラ集団を抱えている現代において、この認識をもつことは重要であろう。

研究成果の概要(英文)：In our specialites, i.e. two German diasporas in Romania (Siebenburgen and Banat), Roma in the Czech Republic, the former British Malaya, and the diaspora problem of the Indian population, we clarified concretely the resisting action which literature played in the crisis of the dismantling of identity.

Based on these, it was shown that it is possible to guess up to the tendency of general behavior of diaspora about the objectification of "memory" by literature in the dismantling phase of diaspora identity. In addition, We presented one of the solutions to the question of why the diaspora group's literary activity tends to heat up in globalization.

研究分野：文学一般

キーワード：ディアスポラ・アイデンティティ 文学のアイデンティティ修復機能 ディアスポラの崩壊 ディアスポラの紐帯としての文学 旧英領マラヤ ズィーベンビュルガー・サクセン バナートのドイツ語文学 チェコのロマと土地改革

1. 研究開始当初の背景

平成 17 年に発足した本研究グループは、ディアスポラがその集団を維持するにあたり、文学に関連して特徴的に見られる現象として次の 5 点を順次明らかにし、その具体的状況を吟味した。

- 1) ディアスポラの維持に不可欠の求心性の象徴と言うべき機能を果たす文学が存在すること
- 2) グローバル化の中で、移動の自由と文化比較に関する知見が飛躍的に拡大し、ディアスポラの成員は、所属すべき文化と帰属意識を自ら選択すべき機会に遭遇する。その際に文学が参照され、集団及び個々の行動の決定に際して文学が醸成した基本的情調が大きく影響すること
- 3) ディアスポラ成員のアイデンティティが彼らの置かれた状況と共に変化・変容するなか、アイデンティティの参照規範を、更新しつつ提供し続けることこそ、実は文学の役割となっていること

4) 現代のディアスポラは、自身の文学及び歴史的資料に関して、極めて旺盛なアーカイヴ化の努力を継続し、ディアスポラの記憶を蓄積し、それが紐帯形成の一翼を担っていること。

5) ディアスポラ集団で近年活発な系譜学的自己探求の動きには、従前の系譜からの意図的書き換えが多く観察されるが、これは、体制の変化よりも、告発の文学に影響された、自己意識の変革が顕著で、同時に文学が内包する自己認識のダブルバインド状況も強く反映していること。

ディアスポラの動的平衡状況における成員の精神的側面に関する、3) の文学による紐帯機能と更新についての議論の過程でも、文学の生産と受容への着目の有用性は明らかであった。特に 5) に挙げた集団維持のための系譜の書き換えを認めながらも、集団を離脱して生活の場を世界に拡散させていく新世代のディアスポラ、あるいはそれを完全に拒絶してホスト集団に吸収される人々の帰属意識を正確に捉えるために、文学による集団の表象化と受容の意味は大きい。何故なら、特に 4) の研究過程において、社会的・政治的環境に変化に伴って離脱のモーメントが大きくなるのに並行して、集団内部に 3) で本研究グループが追求した「記憶」のアーカイヴ化と客観視が逆に強く推進されているように観察できる事例が少なくなかったからである。例えば、ルーマニアからのドイツ帰還者の文化雑誌『南東ドイツ四季報』1) は、世代交代の過程で学術誌の性格を強めた『シュピーゲルンゲン』2) に衣替えし、自己認識の客観性を強めた。掲載される文学作品の傾向も多様化している。アーカイヴ化はアイデンティティの再確認を促す、「記憶」の共有による紐帯強化・修復、離脱阻止の一手段でもあった。しかし特に新世代の離脱者も、2) で論じた過程において、この客観性の確保によって、すなわち一度は共有したディアスポラが集積した文学と記録をもとに、5) で本グループが明らかにした自己認識のダブルバインド状況を客体化して踏まえた上で、あえて内在化させた上で(内面封鎖化)、ホスト集団の文学的営為をも比較参照しつつ帰属の選択を行うことが可能になるのであり、事実そうする(ディアスポラ・アイデンティティの客体化による自己解放)。この場合、2) のプロセスを踏み直せば、古い帰属意識に立ち戻ることも容易である。ディアスポラの解体要因となるこの自己解放と、紐帯維持の力動の相克を「規範としての文学」において検証し、正確に記述することが、本研究グループの新しい課題となった。

2. 研究の目的

ディアスポラ集団は、離脱者と新規参加者の動的平衡によって維持されており、前者の増加によって解体に向かう。しかしグローバル化により移動の自由が劇的に拡大すると、その容態の正確な記述には、地理的空間内の集団の統計的増減のみならず、成員のアイデンティティの変容に焦点を当てることが不可欠となった。本研究グループは、平成 17 年度以降、ディアスポラ維持における文学の紐帯機能に着目して研究を進めてきた。本研究は、集団内の文学生産と受容に注目し、特にディアスポラからの離脱・復帰の諸相に焦点を当て、文学の紐帯機能の破綻、機能継承の停止と回復の局面の描出を目的とする。その際、ディアスポラ意識の「内面封鎖化」という新しい事象の存在を浮き彫りにし、集団の解体を一義的に規定できないことも明らかにする。

3. 研究の方法

(2) 平成 28 年度

各研究者の個別事項：ディアスポラ解体の力動及び紐帯維持の力動を持つ文学の生産と受容状況についての調査及び資料収集のため、調査対象の機関、研究協力者のもとに赴く。主な訪問先は以下の通り。

鈴木：ミュンヘン大学附置施設南東ヨーロッパドイツ文化研究所、東方ドイツ人会館図書館(在ドイツ・ミュンヘン)、ウィーン国立図書館、オーストリア国立図書館山下：マレーシア国立図書館佐藤：チェコのロマに関する各団体、チェコ国立図書館

藤田：ベルリン文学館及びルーマニア・ティミショアラ大学図書館及びドイツ語学科研究遂行期間中、各国の研究協力者とは情報の交換にとどめ、連携研究者等としての処遇はせず、本研究グループの組織に取り込んだ形での共同研究の形態はとらないこととする(論文については、必要に応じて共同執筆はありうる)。初年度であっても、まとめることが可能な成果は論文の形

で公表する。

研究組織の全体事項：上記フィールド調査の報告と討議、各研究対象に関する情報の共有を密にし、特にディアスポラ解体における文学の役割について、「内面封鎖化」の事例収集につとめ共通理解を深める。

・平成 29 年度

各研究者の個別事項：前年度に引き続き、必要に応じて海外調査を実行する。可能な限りの成果を、論文の執筆と学術雑誌への投稿を開始する。

研究組織の全体事項：解体圧に瀕した局面におけるディアスポラの紐帯維持のための文学生産とその受容、個人レベルにおけるディアスポラ・アイデンティティの客体化による自己解放と文学及びホストマジョリティの文学的操作とディアスポラ・アイデンティティの客体化の各問題に関する討議を行い、共通認識を深める。

・平成 30 年度

各研究者の個別事項：各対象ディアスポラに関する論文を執筆し、各自が所属する国内外の学会誌で発表する。また各自の所属学会で口頭による研究発表を行う。同時に、ミュンヘン大学附置施設南東ヨーロッパドイツ文化研究所等、連携している海外の研究機関の研究者に研究成果に対する評価を乞い、次の研究計画のためのアドバイスを求める。

研究組織の全体事項：ディアスポラ・アイデンティティの客体化による自己解放に関する議論を深める。その上で組織全体の成果を研究報告書の形で刊行する。研究の取りまとめと報告書の作成においては藤田が研究代表者を補佐する。

4. 研究成果

本補助金の交付が平成 28 年 10 月にずれ込んだため、上記の各年度研究計画を圧縮する形になったが、おおむね計画の通りに遂行した。ただし、研究代表者の調査をウィーン国立図書館の 20 世紀初頭以前の史料に絞り込むなど、期間圧縮に伴う若干の変更があった。

・平成 28 年度

各研究者の個別事項：ディアスポラ解体の力動及び紐帯維持の力動を持つ文学の生産と受容状況についての各分担者の研究内容に応じて、調査及び資料収集のため、以下のように調査対象の機関、研究協力者のもとに赴く予定であったが、本研究に対する科研費の採択が年度途中の 10 月採択であったため、出張のやりくりがつかず、鈴木、藤田は出張を 29 年度に延期した。鈴木のコンタクト先である南東ヨーロッパドイツ文化研究所のアッカー氏から共同研究者としての申し出があったが、初期の計画通り、コンタクト先の研究者は共同研究者としないこととした。予定訪問先は以下の通り。

鈴木：ミュンヘン大学附置施設南東ヨーロッパドイツ文化研究所、東方ドイツ人会館図書館（在ドイツ・ミュンヘン）、オーストリア国立図書館 山下：マレーシア国立図書館 佐藤：チェコのロマに関する各団体、チェコ国立図書館 藤田：ベルリン文学館及びルーマニア・ティミショアラ大学図書館及びドイツ語学科

初年度であっても、まとめることが可能な成果は後述の通り各自の論文の形で公表することができた。

研究組織の全体事項：上記フィールド調査の報告と討議、各研究対象に関する情報の共有を密にし、特にディアスポラ解体における文学の役割について、山下と佐藤の報告に基づき、「内面封鎖化」の事例収集につとめて共通理解を深めることに関しては、実際に 2 度の研究会を開催して行うことができた。

・平成 29 年度

各研究者の個別事項：前年度に引き続き、必要に応じて海外調査を実行した。山下（旧英領マラヤ地域）、鈴木（オーストリアにおける文献調査）、佐藤（チェコ）は調査のための現地調査を遂行し、ほぼ調査を終了した。各研究者は可能な限りの成果を、論文の執筆と学術雑誌への投稿を開始した。

鈴木と藤田は、ルーマニアのズィーベンピュルゲンの（トランシルヴァニア）のドイツ系マイノリティ作家エギナルト・シュラットナー（ルーマニア・シビウ近郊在住）の作品『首を刎ねられた雄鶏』が、本研究のテーマ及び分担テーマにとって非常に有意義な材料を提供していることが把握できたため、一枚岩と目されているズィーベンピュルガー・ザクセンザクセンの内部の詳細及びそのナチズムによる画一化をめぐる変遷を描き出したこの作品の研究を共同で始め、作家本人と密接に連絡を取って了解を得て、作品の翻訳作業を開始した。これに関連して、鈴木は平成 30 年度初めに、ドイツ・オーストリアにおいて調査を行う必要が生じた。藤田は日本国内から戦後のパナートからドイツに「帰還」したドイツ系住民に関する貴重な資料を収集することに成功した。

研究組織の全体事項：解体圧に瀕した局面におけるディアスポラの紐帯維持のための文学生産とその受容、個人レベルにおけるディアスポラ・アイデンティティの客体化による自己解放と文学及びホストマジョリティの文学的操作とディアスポラ・アイデンティティの客体化の各問題に関する討議を行い、共通認識を深めることに努めた。

・平成 30 年度

各研究者の個別事項：各対象ディアスポラに関する論文を執筆し、各自が所属する国内外の学会誌で発表した。また各自の所属学会で口頭による研究発表を行った。

例えば研究代表者鈴木は、ディアスポラ・アイデンティティの解体と記憶の抵抗における文学の紐帯機能研究において、トランシルヴァニアのドイツ系住民が本来のドイツ語地域とまったく同様に新聞を中心とする当時のマスメディアが主導して、入念な準備のもと大規模に開催された国民詩人シラーを記念する「シラー祭」(生誕及び没後 100 年祭)を祝い、その中で、自身のアイデンティティを「ドイツ人」とする意識が形成され、かつ堅固なものとなり、ナチ化の果ての悲惨な壊滅状況の後でも文学の紐帯機能によってそれが保持されてゆく状況を把握することができ、それを発表した。いわゆる「ドイツ教養市民層」の連帯が「ドイツ民族」意識の共有を生み、それがトランシルヴァニアにも先鋭化して波及していたことになるのである。これはトランシルヴァニア研究においても新しい切り口の研究である。各分担者も、雑誌論文を中心に研究成果を発表した。

研究組織の全体事項：ディアスポラ・アイデンティティの客体化による自己解放に関する議論を深めた。ネット媒体によって直ちに本国と空間を超えて一体化できる新時代のディアスポラ研究の手法の開発が必要である点について、議論を深めている。

現在、我々のディアスポラ形成と文学の紐帯機能に関する書籍の刊行を準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

山下博司「現代マレーシアとヒンドゥー教の諸問題 - 「寺院」と「司祭」を焦点に - 」、『東方』34 巻、2019 年、167-188 頁。

鈴木道男「トランシルヴァニアのシラー祭 - 1859 年の生誕 100 年祭・1905 年の没後 100 年祭を中心に 」、『国際文化研究科論集』(東北大学大学院国際文化研究科) 第 26 号、2018 年、29-42 頁、43-54 頁。

藤田恭子、佐藤雪野「旧東ドイツ地域・ハレ市における移民・難民統合と教育」、『国際文化研究』26 号、2016 年、43-54 頁。

山下博司「Transformation and Ritual Space in Singapore's Hindu Temples 」、『国際文化研究科論集』、第 26 号、2018 年、89-100 頁。

山下博司「移民社会とヒンドゥー教 - マレーシア・イポーの司祭養成の事例 - 」、『宗教研究』90-395 号、2018 年、311-312 頁。

山下博司「The Nagarattar Temples and a Priest Training Institution in Chettinad, South India 」、『国際文化研究科論集』(東北大学大学院国際文化研究科) 第 25 号、2017 年、85-95 頁

山下博司「ジャカルタのヒンドゥー寺院と儀礼空間 「奉仕」と「逸脱」をめぐる」、『宗教研究』、第 90 巻別冊、2017 年、311-312 頁。

佐藤雪野「戦間期チェコスロヴァキアにおける土地改革 民族的要因の検討を中心に 」、『近代史研究会会報』、93 号、2017 年、1-12 頁。

藤田恭子「ルーマニアにおけるドイツ語学文学研究の現在を読む ルーマニア独文学会会長 ジョルジュ・グツ教授の古稀記念論集刊行に寄せて 」、『東北ドイツ文学研究』(東北ドイツ文学会) 査読無、第 57 号、2016 年、123-130 頁。

藤田恭子「ルーマニアにおける国家保安部 (セリヴァ) 記録文書公開 ヘルタ・ミュラーが見る『過去の克服』の現実 」、『東北ドイツ文学研究』(東北ドイツ文学会) 査読無、第 57 号、2016 年、105-117 頁。

〔学会発表〕(計 2 件)

藤田恭子「《周縁》と《カノン》」 - ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとゲーテ 」、シンポジウム『東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力』、科研費・基盤研究(B)『東欧文学の多言語的トポス をめぐる研究』(H27-H30、代表者：井上暁子)主催：東京大学人文社会系研究科現代文芸論研究室共催(招待講演) 2018 年。

藤田恭子「ブコヴィナのユダヤ系詩人たちにおけるゲーテとバッハ ツェラン『死のフーガ』とその周辺を手掛かりに 」、上智大学ドイツ文学会(招待講演) 2016 年。

〔図書〕(計 1 件)

山下博司(劉譯)『下一站・印度 - 印度人的「能力」與「腦力」』、縦横跨國企業領導者激増的秘

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：山下博司

ローマ字氏名：YAMASHITA, Hiroshi7

所属研究機関名：東北大学

部局名：

職名：名誉教授

研究者番号 (8 桁)：2023042

研究分担者氏名：藤田恭子

ローマ字氏名：FUJITA, Kyoko

所属研究機関名：東北大学

部局名：大学院国際文化研究科

職名：教授

研究者番号 (8 桁)：80241561

研究分担者氏名：佐藤雪野

ローマ字氏名：SATO, Yukino

所属研究機関名：東北大学

部局名：大学院国際文化研究科

職名：准教授

研究者番号 (8 桁)：40226014

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。